

## 基礎演習 目的と日程

社会学科 村瀬洋一

(e-mail: murase@rikkyo.ac.jp)

### 1. 演習の目的

- 1) 批判的精神を持ち、真実とは何かを自分で判断できる能力を身につける
- 2) 社会学の「考え方」の習得 ー 目的の設定、仮説やモデルの作り方
- 3) 自分で研究テーマを設定し、調査と分析により成果を発表する能力の習得

### 2. 主な内容

1) テキストを用いて、社会学の基礎知識と、理論や仮説の作り方などの「社会学の考え方」を理解する。自分で理論やモデル、仮説をつくれるように。

テキストは各自で早急に購入すること。ネット上書店などで中古を安く買えば良い。

2) 文献検索法（雑誌記事索引等のデータベースによる文献リスト作成）や、発表の技法、資料の作り方などの「仕事の進め方」あるいは「知的生産の基礎技術」の全般的訓練。

3) データ分析実習とグラフ作成等の基礎訓練

4) マクロデータ（政府の統計など集計レベルのデータ）収集・分析プロジェクト

国ごと、都道府県ごとのデータを集め、社会の様々な特性を分析する訓練

### 3. 日程（予定 後期14回）

- 0922 1. 今後の予定と研究例の説明
- 0929 2. 自分の興味あるテーマと、興味ある新聞記事を発表  
★記事をコピーする前に、必ず記事日付と名前を書くこと
- 1006 3. 『基礎ゼミ 社会学』2章、文献検索法について
- 1013 4. 『基礎ゼミ 社会学』3章、各自の文献リストについて
- 1020 5. 『基礎ゼミ 社会学』8章、統計データ（マクロデータ）収集法の解説
- 1027 6. 『基礎ゼミ 社会学』9章
- \*\*\*\*\* 秋休み \*\*\*\*\*
- 1110 7. データ収集結果の発表
- 1117 8. データ収集結果の発表
- 1124 \*\*\*\*\* 休校日 \*\*\*\*\*
- 1201 9. 『基礎ゼミ 社会学』10章
- 1208 10. 『基礎ゼミ 社会学』14章
- 1215 11. グラフ作成結果の発表
- 1222 12. グラフ作成結果の発表
- \*\*\*\*\* 冬休み \*\*\*\*\*
- 0112 13. 各班の発表案を提示
- 0119 14. 各班の発表案を提示
- 0204 最終発表会

★都道府県について47の数字を集める

社会調査実施能力は、主に調査法関連の科目で学ぶので、『履修要項』の社会調査士の説明を読み、関連科目を積極的に履修すること。また、2月に最終発表会をやるので、必ず予定をあけておくこと。

#### 4. 演習に関するホームページと e メール

恒常的に e メールでの連絡をするので、立教メールを必ず見る。また、以下の村瀬ゼミページに最新情報を掲載するので見ること。

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/murase>

演習内容に関して質問等があれば、演習中の質問も大歓迎しますが、e メールを出しても良い。ただし、成績に関する質問や陳情はご遠慮ください。名前がないメールが多いので、必ず自分の名前を明記してください。

村瀬の研究室は12号館 3 階です。面会時間 (Office hours: 木曜日 午後12:30-1:20) は研究室を開放しているので、質問などあれば予約なしで自由に来てください。研究室のドアに、村瀬の都合の良い時間がはってあります。ふだんは研究・教育活動のため多忙なので、来訪の際はメールか、研究室に電話をしてからの方が良いでしょう。

#### 5. 社会学研究法の概説

##### 5.1. 社会からデータをとるにはどのような方法があるか

- 1) 調査 – 社会学に多い
- 2) 実験 – 心理学に多い
- 3) 観察 – 人類学や教育学に多い
- 4) 内容分析 – content analysis: 文章や映像の内容を数量化して分析
- 5) マクロデータの利用 – 各種の統計年鑑や白書、総務省統計局ホームページ

<http://www.stat.go.jp> などを参照

『日本統計年鑑』の内容はすべてここに載っている

##### 5.2. 社会調査の種類

表1 調査対象とデータ処理方法から見た社会調査の分類

調査対象	処理方法	
	統計的	記述的
全体	全数調査	
部分	標本調査	事例調査

注: 原・海野(2004. p26)より作成

問 街角での観察や、知人へのインタビューは、どのような問題点があるか

##### 5.3. 仮説を作る

研究目的を明確にして、仮説を作ることが大切。

仮説の例 – 原因と結果の2変数を含む文を作る

- ・農村部ほど平等を好むのではないか
- ・金持ちほど「環境にやさしい」商品を買うのではないか

次に、農村部、平等志向などを、どう測定するか考え、データをとる。

調査が終わりデータが完成したら、仮説にもとづいて分析する。

結果を、調査報告書、論文、本にまとめる。

### 5.4. 社会調査結果の例

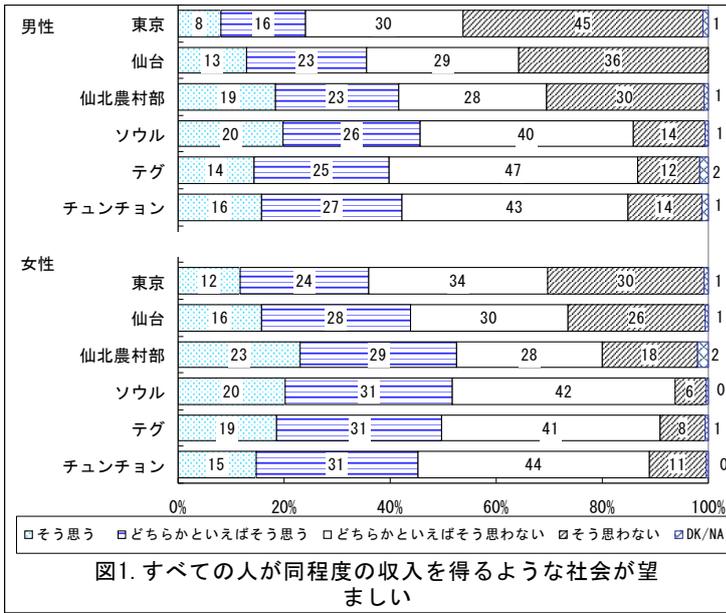


図1. すべての人が同程度の収入を得るような社会が望ましい

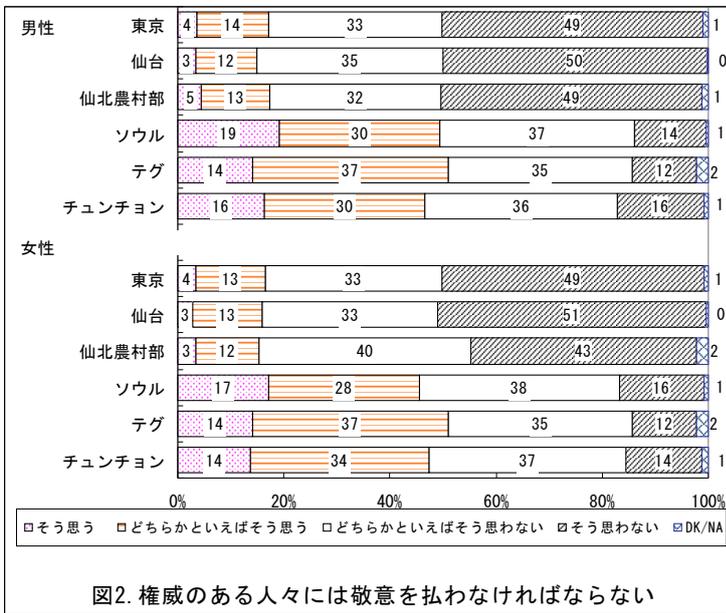


図2. 権威のある人々には敬意を払わなければならない

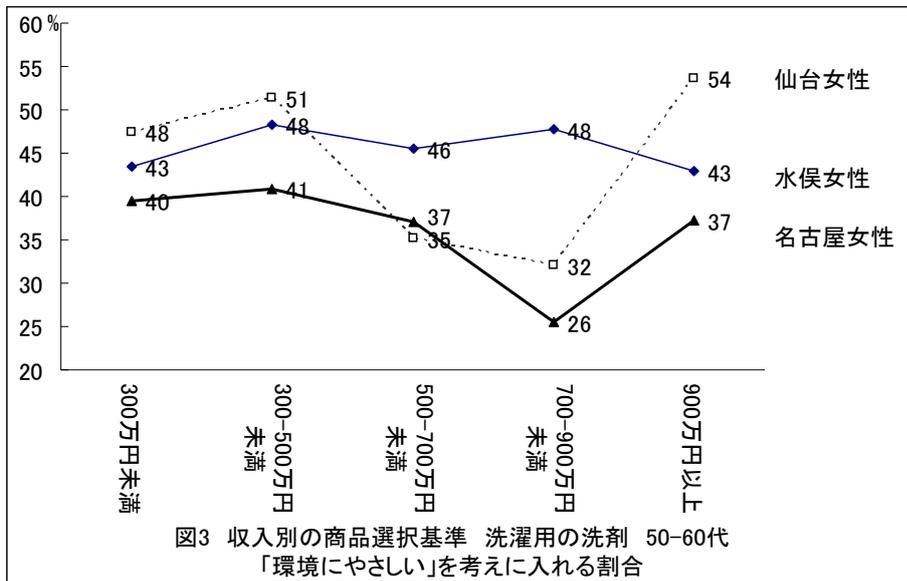


図3 収入別の商品選択基準 洗濯用の洗剤 50-60代 「環境にやさしい」を考えに入れる割合

## 5.5. 結論として何を主張するか

結論とは、結果のまとめでなく、分析結果をもとに、自分が何を主張するかが重要。社会の変化、今後の政策など。

現実には、調査データにもとづかない直感での分析や、ごく限られた対象での調査、ネットでかきあつめたデータでの研究も多い。トンデモ本もあるし、データのない無責任な評論も多いので、批判的精神を持って研究に接することが重要。

## 6. テキストと参考書の解説

テキストは講義中に随時活用するので、必ず購入すること。参考文献も、自分が興味を持てるものはできる限り購入し、自宅で読みたいときにすぐ読める状態にするとよい。

学生時代は贅沢はつつしむ一方、本代と食事代は惜しまないことをおすすめします。本代は知識を、食事代はあらゆる仕事の基礎となる体力を養うために必要です。

以下、★印は村瀬の解説。

### 6.1. テキスト

工藤保則・大山小夜・笠井賢紀編著. 2017. 『基礎ゼミ 社会学』世界思想社.

### 6.2. 参考書（著者名のアルファベット順）

赤川学. 2004. 『子供が減って何が悪い！』筑摩書房.

ボーンシュテット・ノーキ著＝海野道郎・中村隆監訳. 1990. 『社会統計学 — 社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社.

中央公論編集部編. 2001. 『論争・中流崩壊』中央公論新社.

原純輔. 1997. 「戦後日本の階層と階層意識 — S S M調査1955-1995の軌跡（特集 社会階層の計量分析）」. 『行動計量学』24巻1号:11-19.

原純輔他編. 2000. 『日本の階層システム』1～6巻. 東京大学出版会.

★1995年S S M調査の分析結果をもとにした論文集。

原純輔編. 2002. 『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房.

★産業化、平等化、高学歴化などの社会現象について幅広く扱っている。大きな社会の変化について考えるのにおすすめ。

原純輔編. 2008. 『社会階層と不平等』放送大学教育振興会.

原純輔・盛山和夫. 1999. 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会.

原純輔・海野道郎. 2004. 『社会調査演習 第2版』東京大学出版会.

★調査票や調査員手引きの見本などがあり、よくまとまっている。

橋本健二. 2018. 『新・日本の階級社会（講談社現代新書）』講談社.

橋本健二. 2018. 『アンダークラス（ちくま新書）』筑摩書房.

林信吾. 2005. 『しのびよるネオ階級社会 — “イギリス化”する日本の格差』平凡社.

依田高典. 2016. 『「ココロ」の経済学 — 行動経済学から読み解く人間のふしぎ』ちくま新書.

飯尾潤. 2013. 『現代日本の政策体系 — 政策の模倣から創造へ』ちくま新書.

今田高俊. 1989. 『社会階層と政治』東京大学出版会.

蒲島郁夫. 1988. 『政治参加』東京大学出版会.

鹿又伸夫. 2001. 『機会と結果の不平等 — 世代間移動と所得・資産格差』ミネルヴァ書房.

荻谷剛彦. 2001. 『階層化日本と教育危機 — 不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』有信堂高文社.

吉川徹. 2018. 『日本の分断 — 切り離される非大卒若者(レッグス)たち』光文社.

小林淳一・木村邦博. 1991. 『考える社会学』ミネルヴァ書房.

★初学者が実証的な社会学を学ぶために、よくできた本。

小林淳一・木村邦博. 1997. 『数理の発想で見る社会』ナカニシヤ出版.

高坂健次他編. 1998. 『講座社会学』1～16巻. 東京大学出版会.

- ★社会学の各分野についての論文集。岩波の講座より実証的。
- 三輪哲他編. 2008. 『2005SSM調査シリーズ 1～15』東北大学大学院文学研究科行動科学研究室内2005年社会階層と社会移動調査研究会事務局。
- ★SSM調査の報告書論文集。日本の社会階層研究に関する最先端の研究結果が掲載されている。
- 藻谷浩介. 2010. 『デフレの正体 ―経済は「人口の波」で動く』角川書店。
- 村上泰亮. 1984. 『新中間大衆の時代』中央公論社。
- 村瀬洋一. 2006. 「階級階層をめぐる社会学」宇都宮京子編『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房。
- 直井優他編. 1990. 『現代日本の階層構造』1～4巻. 東京大学出版会。
- 大竹文雄. 2005. 『日本の不平等』日本経済新聞社。
- ★橋木に反論し日本は平等だとしている。
- 大竹文雄. 2019. 『行動経済学の使い方』岩波新書。
- 大竹文雄. 2010. 『競争と公平感 ―市場経済の本当のメリット』中央公論新社。
- レイブ・マーチ著=佐藤嘉倫・大澤定順・都築一治訳. 1991. 『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社。
- 佐藤俊樹. 2000. 『不平等社会日本 ―さよなら総中流』中央公論新社。
- 佐藤嘉倫他編. 2011. 『現代の階層社会 1～3』東京大学出版会。
- ★2005年SSM調査の分析結果をもとにした論文集。
- 盛山和夫. 2011. 『経済成長は不可能なのか ―少子化と財政難を克服する条件』中央公論新社。
- 盛山和夫他編. 2011. 『日本の社会階層とそのメカニズム ―不平等を問い直す』白桃書房。
- ★階層に関する最新の分析結果をまとめた論文集。
- 盛山和夫他. 2015. 『社会を数理で読み解く ―不平等とジレンマの構造』有斐閣。
- 杉野勇. 2017. 『入門・社会統計学：2ステップで基礎から[Rで]学ぶ』法律文化社。
- 白波瀬佐和子編. 2006. 『変化する社会の不平等 ―少子高齢化にひそむ格差』東京大学出版会。
- 数土直紀. 2010. 『日本人の階層意識』講談社。
- 数土直紀. 2013. 『信頼にいたらない世界 ―権威主義から公正へ』勁草書房。
- 数土直紀. 2015. 『社会意識からみた日本 ―階層意識の新次元』有斐閣。
- 橋木俊詔. 2006. 『格差社会 ―何が問題なのか』岩波書店。
- 橋木俊詔・参鍋篤司. 2016. 『世襲格差社会 ―機会は不平等なのか』中公新書。
- 田辺俊介. 2011. 『外国人へのまなざしと政治意識 ―社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房。
- 田辺俊介編. 2019. 『日本人は右傾化したのか ―データ分析で実像を読み解く』勁草書房。
- 谷口尚子. 2005. 『現代日本の投票行動』慶應義塾大学出版会。
- 谷岡一郎. 2000. 『「社会調査」のウソ ―リサーチ・リテラシーのすすめ』文芸春秋。
- ★世間一般の調査の問題点について分かりやすく解説した新書。
- 谷岡一郎, 仁田道夫, 岩井紀子編. 2008. 『日本人の意識と行動：日本版総合的社会調査JGSSによる分析』東京大学出版会。
- 筒井淳也. 2015. 『仕事と家族 ―日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』中央公論新社。
- 筒井淳也他編. 2016. 『計量社会学入門 ―社会をデータでよむ』世界思想社。
- 海野道郎・原純輔. 2004. 『社会調査演習 第2版』東京大学出版会。
- 八代尚宏. 2011. 『新自由主義の復権 ―日本経済はなぜ停滞しているのか』中央公論新社。
- 安田三郎・原純輔. 1982. 『社会調査ハンドブック (第3版)』有斐閣。
- ★同様のタイトルの本は多数あるが、これが内容的にもっとも整備されている。
- 寄本勝美. 2003. 『リサイクル社会への道』岩波新書。
- 与謝野有紀編. 2006. 『社会の見方、測り方 ―計量社会学への招待』勁草書房。
- 和田英樹. 2006. 『「新中流」の誕生 ―ポスト階層分化社会を探る』中公新書。
- ハンス・ザイゼル著=佐藤郁哉訳. 2005. 『数字で語る ―社会統計学入門』新曜社。

## 7. 社会調査士資格について

調査と分析の能力のある人に対して資格を与える制度があります。単位を取るだけで資格取得できますが、実習を真面目にやれば、現実社会を調査し分析する能力が身につく、

自分の訓練のためにはとても良いので、履修要項を見て積極的に取り組むと良い。

## 8. 注意点

やる気のある人ならば誰でも歓迎です。最後までゼミをやり直し卒論を書いてください。バイトやサークル等をゼミよりも優先することはないように。他学部を含め、他のさまざまな講義も積極的に受講して視野を広げ、社会統計学の基礎訓練や情報処理、英語なども身につけておいてください。

また毎日、新聞やテレビニュースを見て、様々な雑誌に目を通すなど、自分の世界を広げる努力をしてみてください。大学外の、現実の社会と接する努力をすることを、とくにおすすめします。

遅刻や無断欠席は厳禁!欠席する場合は、必ず事前にメール等で連絡をすること。

テキストは早急に買うこと。学術書は、普通の書店にはあまりない。

## 9. 成績評価

発表の成果と討論の参加具合、課題によって決定する。課題の内容が充実し、とくに、自分自身の考えを豊富に書いていた人を評価する。討論に積極的に参加し、演習の発展に貢献した者、良い質問をした者は記録し高得点を付ける。発表内容が良かった者も、もちろん高評価となる。遅刻や無断欠席は減点する。

## 10. 引用法と盗作について

引用と盗作は違うものである。引用は自由だが、必ず引用元を書かなくてはならない。レポートや論文作成の際に、引用元を書かずに引用すれば、盗作したことになってしまうので、十分に注意すること。最近、ネット上の文章をそのままコピーしてレポートで使う例も増えているが、これも完全なルール違反である。

他人の文章を、自分の文章であるかのように書くと盗作になるが、悪気はなくとも、引用元を明示せずに盗作になっているものが時々見られる。レポートや卒論等で、他人の文書を引用するときは、必ず引用部分を「 」でくくり、引用の前に、引用元を書くこと。それ以外の形式で引用してはいけない。また、必ず「引用元」を明示すること。引用元を書かずに引用すると、盗作したことになるので、著作権法に反し、学問上、重大なルール違反となる。引用は自由だが、盗作してはいけない。

他人の文章を引用するときは、山田(2006: p. 27)によれば、「○○」である、などのように、必ず引用元を先に書くこと。

また、インターネット上の画像や図などを勝手に使用すると盗作になるので、やってはいけない。グラフなどは、元の数字を使って、自分で作り直すこと。

★文献リストの形式 — 著者名と発行年を必ず最初に書く。発行年は半角数字で。その後、「論文名」「本や雑誌名」と発行所を書くこと。論文名は一重かっこ、本や雑誌名は二重かっこを使う。上記の参考文献や、テキスト巻末の文献リスト形式を参照。

発表や資料作成については、第三者が読んだ時に内容が伝わるために、何を工夫すれば良いか、よく考えることが重要。立教大学の大学教育開発・支援センター作成の

- ・ Master of Writing (レポートの作成)
- ・ Master of Presentation (プレゼンテーションの準備)

の内容を理解する(web上に資料あり)。

## 11. ネット上の情報について

基本的に、ネット上の情報や、ネット上の事典、ウィキペディア、各種ブログやネット上データは、「ガセネタ」も多く信憑性が低い。個人が趣味で作った文章で、正確なチェックはなく、いいかげんで信用できない情報が多い。また、すぐに消えてしまう情報も多いので、研究において使うべきではない。必要な情報は、本として出版されているものから引用すること。本として出版されたものは、編集者のチェックもあり信用度は高い。

また、ネット上にあるグラフを、そのままコピーして自分のレポートで使うことは、図やデザインの無断使用となるので著作権法違反である。自分でデータの数字を入手して、グラフを自分で作り直すこと。

多くの場合、最新のデータは本や統計資料となっているので、データを調べる時は、必ず図書館へ行くこと。データ検索をネットのみですませることは、絶対にしてはいけません。図書館の参考室には、各種の事典や図鑑、数十冊からなる百科事典もある。まず図書館で、きちんとした百科事典の索引を見て、使ってみると良い。百科事典を馬鹿にしてはいけません。なお、信用できる統計データも、ネット上に少しはあるが少ない。これについては、村瀬ゼミホームページの「文献や統計リンク集」などを見る。また、調査データについては、立教大学のデータアーカイブや、SSJデータアーカイブ、大阪大学SRDQ（社会調査データベース）などを見ること。

## 12. 文献検索について

立教内LANに接続されているパソコンであれば、無料で使えるオンラインデータベースが各種ある（あるいはVPN接続をして立教のイントラネットへのアクセスをする）。**図書館ホームページ**の解説をよく読むことが重要。学術雑誌内の目次情報や、新聞記事検索（学内のみ）が可能。まずは、以下を使いこなすとよい。

- ・ 国立国会図書館ホームページ 「雑誌記事索引」  
    **国会図書館サーチ** → 「記事・論文」ボタン
- ・ サイニィ (CiNii Articles 論文情報ナビゲータ 学術雑誌目次等)
- ・ Google Scholar
- ・ 日本社会学会ホームページ 文献情報データベース

学会が出している学術雑誌を読むことは重要。新しいものはデータベースに入っていないしネット上にもないので、必ず紙の目次を見ること。目次情報のみの検索が多いので、本文は図書館で入手する。日本社会学会が年4回出す雑誌は『社会学評論』である。その他、『社会心理学研究』や数理社会学会『理論と方法』などを手に取ってみるとよい。

その他、村瀬ゼミホームページの目次下にある「文献や統計リンク」をよく見ること。

## 13. 新聞記事検索について

立教大図書館ホームページの上「探す・調べる」を見て「**オンラインデータベース**」を使ってみること。

<http://library.rikkyo.ac.jp/librarypress/search/>

必ず、各社のデータベースを使うこと。まずは朝日新聞「聞蔵」などを使ってみる。なお、ライセンス契約上、同時使用人数が限られているので、使用後は、必ず**ログアウト**をする。

池袋図書館2階に、PCヘルプデスクがあるので、使い方に自信がない時は質問するか、データベースのマニュアルなど借りるとよい。

### 記事検索に関する課題

各社の記事データベースを使う。最近の記事ではなく、この数十年について検索すること。好きな言葉を使い検索すれば良い。各社の無料ホームページでなく、立教の記事データベースを使う。

何か一つの記事をダウンロードして、ブラックボード掲示板に、記事の要約と、内容への意見、合わせて300字くらいを、第2回ゼミ前日夜までに書き込む。記事ファイルも掲示板にアップすること。

### 14. 文献リストの作成

上記の雑誌記事索引やサイニィの他、EBSCOhostやJSTORも使って、好きなテーマで検索し、自分の研究に必要な、文献リストを作成する。『社会学評論』や『社会心理学研究』などの最新号も、必ず図書館で現物を手に取って、目次を見ること。

本文をすべて集める必要はなく、読むべき文献の候補が良い。文献リストの形式は、上記のものを参考に、必ず、著者名と発行年（半角数字）を最初に書く。論文名は「」、雑誌名や単行本は『』で囲む。冒頭に点を点を付けたたり半角を入れたりしない。2行以上になる時は、2行目以降の冒頭に空白を入れる。

ブラックボード掲示板に、自分の研究テーマと文献リスト（10本以上）を、第4回の開始前10/12夜までに書き込むこと。